

復興支援 七郷中学校野球部活動補助

3年目を迎えて

E4552 発達障害教育コース3年 平田優輔

あの日から3年と9ヶ月が経とうとしている。小さい頃から若林区で育った私にとって、荒浜や閑上という地域はとても馴染み深い場所であったため、あの光景はあまりにも衝撃的だった。東部道路に打ちつける波、無残にも何もなくなった景色は一生忘れないだろう。自宅を失った友人もいたし、家族を失った人もいた。私自身も叔母を亡くした。それでも、みんなが共に前を向いて進んでいっている途中だ。

七郷中学校には主に七郷地区と荒浜地区の子どもたちが通っている。七郷地区には住宅が建ち並び、商業施設も次々に建設されている。さらに地下鉄東西線が来年に開業し、ますます便利になり、復興が進んでいく。その反面、荒浜地区は取り残されている気がしてならない。仮設住宅から通う子どもたちもまだ多くいるのが現状であり、まだまだ課題が山積みだ。

復興に携わる何かが出来ればという思いを抱えて過ごしていた1年の夏に、七郷中学校の夏休みの学習支援ボランティアに申し込んだのがきっかけだった。御縁があってそのまま部活動も見させて頂けることになり、気付けば3年目を迎えている。当初はこれといった目標・目的もなく、子どもたちにこうなって欲しいという明確なものもなかった。ただ関わりを持っていただけで、今思うともったいなかったなと思う。そんな私を大きく変えてくれたのは七郷中学校の子どもたちであり、先生方、保護者の方々、そしてこのような機会を下さった伊藤先生、目々澤先生をはじめとする教育復興支援センターの方々である。大した実績のない私の言うことに素直に耳を傾けて実践してみよう、多くを吸収しようとしてくれる子どもたち。「教育」というものがまだまだ形になっていない私に子どもたちと関わる多くの機会を与えて下さり、なおかつ考え方・関わり方などを丁寧に指導して下さる先生方。お会いするたびに「いつもありがとうございます」と学生の私に大変丁寧な言葉遣いで声を掛けて下さる保護者の方々。教育復興支援センターの方々にはいつも温かい御言葉を頂いており、活動報告に行くたび背中を押してもらっている。こんな素敵なたちに支えられているのはとても幸せなことだと思ったら、今まで流していたことにも発見や感動があり、毎日が新鮮で楽しくなっていた。考え方が変われば、見える世界も変わる。この御縁には感謝してもしきれない。今では気付けば子どもたちのことを考えていて、早く子どもたちに会いたくて仕方がない。

私の今の教育目標は、子どもたちを「カッコいい大人に育てる」ということである。つまり、「あらゆる集団の中で必要とされる大人、当たり前+αが出来る大人に育てる」ということだ。部活動を毎日一生懸命頑張って「うまくなろう、試合に勝とう」という思いを持つことはもちろん大切なことではあるが、こんなに長い時間をかけてその競技だけ上手くなっても意味がない。部活動が職業になり、それで生きていける人はほとんどいないか

らだ。それよりも部活動を通して、物事に対して前向きかつ主体的に取り組む姿勢・態度であったり、思考力・判断力・表現力等を身に付け、人のために動ける人間になって欲しいと強く願う。「生きる力・人間力」といったものを身に付けて欲しいのだ。部活動が終わったあとに子どもたちに何が残っているか。例えば、与えられた仕事だけをこなしていくような人ではなく、「こんな言葉を掛けてあげたらあのお客さん喜ぶだろうな」と考えて一声掛けることが出来たり、作業効率を上げる工夫をしながら働けるような人になってくれたらと思うのだ。だから、結果以上にその過程・準備を見てあげたい。中学校 3 年間で結果が出ずとも、頑張り方を学んで欲しいのだ。自分を知り、他者を思いやり、今何をすべきか考え、実行出来る人はどんな場面でも強いと思うし、そんな人を育てていきたい。しかし、私自身こういった考えにたどり着いたのはつい最近のことであって、これまでは競技能力の向上ばかり考えていたし、とても今述べたような人にはなれていない。これからも子どもたちと一緒に成長していきたいと思う。また、現在は感覚を言語化して子どもたちにわかりやすく伝えることやしっかりとした方針を持って指導することを強く意識しているがまだまだ先生方には及ばない。これからの課題とも言える。

最後に、現在の活動が復興支援になっているかと聞かれると、正直自信がない。だが、復興と言うのは町並みや景色といった目に見えるものばかりではないと思う。その地域に住む人々の心に寄り添っていくことが一番大事なのではないだろうか。だから、長い目で見ていく必要があると思うし、これからの復興を担うのは今の子どもたちであることは間違いない。子どもたちには今必死になって「頑張り方」を学んでもらい、いずれはこの地域で活躍出来る「カッコいい大人」になってもらいたい。それは学校生活の中の部活動を通して培っていけるものだと思っている。それが子どもたちの創る未来に、復興に繋がっていくのだと考えている。

今のような考え方まで引っ張ってってくれた七郷中の子どもたち、先生方、保護者の方々、そして教育復興支援センターの方々には本当に感謝してもしきれない。この恩返しは逸早く教師になり、多くの子どもたちの未来に関わっていくことで果たせるだろう。そして多くの経験を積み、いつの日か七郷に戻ってきて、今の子どもたちのその子どもたちを教える日が来ればなと夢見ている。支えて下さる方々に感謝の気持ちを持って、これからも子どもたちのため、復興のために今現在持てる全ての力を注いでいきたい。

